

## 能村登四郎理論と実作

柴田奈美

### 要約

実作を支える論を構築するために、正岡子規―高浜虚子―水原秋桜子の師系を持ち、筆者の現在の師である俳人中原道夫の師であった能村登四郎の俳句とその論の基礎的研究を行い、自分の実作における推敲方法に応用した。その結果、自分の俳句の作り方を改めて意識することができた。最近軽く考えがちであった「写生」について改めて見直し、今後の創作活動の方針の立て直しをすることができた。

〔キーワード〕 野村登四郎・理論・俳句・創作

### はじめに

俳句の理論研究と俳句の実作とは、車の両輪のようなもので、常にバランスを取りつつ進めていくのが理想である。今まで筆者は正岡子規の俳論を思考の土台として、俳句の実作を行ってきた。近代俳句の源である子規の俳論や俳句を研究することは、文学史を踏まえる点においても、また新たな子規の研究の視点を見つける点においても有意義なことであった。しかし、さらに深みのある、新しい境地の俳句を創り上げていくには、現代俳人の理論と実作の研究をし、

その上に独自の俳論を生み出していかなければならない。

本研究は、自分の実作を支える論を構築するために、正岡子規―高浜虚子―水原秋桜子の師系を持ち、筆者の現在の師である俳人中原道夫の師であった能村登四郎の俳句とその論の基礎的な研究を行ったものである。現代俳人として登四郎を選択した理由は、次の三点による。第一に、数多くの俳論を残していることである。第二に、多くの作品を句集に纏め、理論と作品の対応関係を考察しやすいことである。第三に、優れた現代俳人として評価が定まっていることである。理論は優れていても、作品の評価が低い俳人も多い。理論面・作品面の両方の優れている俳人の一人として、能村登四郎を今回の研究対象とした。

### 一 登四郎の代表句とその理論

登四郎は自分の代表句に対し、その創作過程を隠さずに記している場合が少なくない。自句自解のあるものを引用しつつ、理論とそこから生まれた俳句作品について考察する。

(1) 火を焚くや枯野の沖を誰か過ぐ 登四郎 『枯野の沖』

広々と続く枯れ野。枯れ草を集めて火を焚いていると、遠くに誰

か過ぎて行く。枯れ草を焚きながらそこに留まる人間と、遠くを過ぎ行く人間。関わりがありそうで無い孤独感や親しさ、懐かしさが漂う。枯れ野の遠くを、まるで海のように「沖」と表現したところに茫然感が漂う。写生の句のようでありながら、奥深いものを感じさせる作品である。

登四郎は次のようにこの句を解説している。

視覚にたよった作品ではない。曾て見たものが潜在的に意識の底に沈んで心の底で残滓のようにどろどろとしていたものが、ふと触発されて浮人形のように浮き上り口をついて出て来た——そういう風なものであった。

一見虚構のような実体のないものであったが、虚構ではなかった。このイメージをつくった母胎になるものは私の誠実な写生精神にあった。平凡な一木一草を誠実な観察によって把握したものがそのまま作句の形にならず、幾年かの間に濾過されてはじめて詩のことばとして出てゆく、それから私の制作はいつも密室の中にあつた。

心象と現実、造型と諷詠の皮膜虚実の間に俳句が生まれていった。旅に出ることは稀にあつたが、旅でもとめる素材は目先の興味で終わることが多く、詩として厚みの乏しいものが多いのでつとめて避けるようにしてきた。

(中略)

要するに、眼でものを見てすぐ手でその詩句を書くという、作業的な俳句の制作法に疑いを持つようになった。

俳句が世界の最短詩であるという宿命を負っているだけに、いつそこそこの濾過を経ない作品の安易さをつよく責めた。

(「伝統の流れに立つて」「俳句」昭45・12、『増補能村登四

郎読本』富士見書房 平12・11 三六九〜三七〇頁)

このように、誠実な写生を発想の土台としつつも、自分の裡に暫くは溜めておいて、「濾過」の過程を経てきたものを作品化した。そこに、写生だけではない、奥深いものが看取されるのであろう。

自句自解はないが、「濾過」の時間を経て創られたと考えられる登四郎の句を、句集『枯野の沖』からもう一句挙げて、鑑賞したい。

踏み込んで血がせめぎあふ曼珠沙華 登四郎

一面に曼珠沙華が燃えるように真っ赤に咲いている。その中に足を踏み入れたところ、自分の裡なる血がせめぎあうような心の高ぶりを覚えたことだ、との句意。

秋の彼岸頃に茎が伸びて急に花が咲くので、彼岸花とも言う。球根には毒を含み、毒々しさを感じさせる赤色のため、一般人には嫌われる傾向があるが、俳人の多くは好んで詠む。例えば、高浜虚子の編んだ『新歳時記』(三省堂増訂版初版昭26・10 五五四頁)には、次のような曼珠沙華の句が、例句として挙げられている。

曼珠沙華に稲被さるや土手の秋 碧堂

曼珠沙華出水の上にうつりけり たけし

道すぢをなしてさかりや曼珠沙華 草秋

かたまりて出水の中の曼珠沙華 爽洋

雨降ればすぐに出水や曼珠沙華 ひろ女

これらは、曼珠沙華とその周辺の景色を、スケッチしたレベルに過ぎない。登四郎の言う「眼でものを見てすぐ手でその詩句を書く」という、作業的な俳句の制作法」によって作られた作品である。写生の基本を学ぶために、ここから出発することは良いとしても、いつまでもそのレベルに留まっていてはならない。この歳時記に挙げられた例句の中で、自分の裡を通して作られたと感じられる作品と

しては、次のようなものがある。

考へても疲るゝばかり曼珠沙華

立子

曼珠沙華抱くほどとれど母恋し

汀女

曼珠沙華あれば必ず鞭うたれ

虚子

スケッチレベルの作品に対し、これらは作者という人間が投影され、より深みのある作品となっている。

登四郎はこのような一元的な句を、「濾過」という作業を通して意識的に創ろうと努力したのである。

(2) 春ひとり槍投げて槍に歩み寄る

登四郎

春の運動場で、青年が一人黙々と槍投げの練習をしている。投げでは取りに行く、その繰り返し。忍耐力の必要な練習を、青年は孤独に耐えつつ重ねている。渾身の力を込めて槍を投げる瞬間と、力を抜いてゆっくりと槍に歩み寄って行く青年の様子が目に浮かぶようである。登四郎は次のように解説している。

不調時はおそろしいもので、綜合誌で二、三回叩かれると、今度は無視されるようになった。いわゆるお呼びがなくなつたのである。私はむなししい気分でもそれでも俳句をつくっていた。

(中略)

この句も、正直に言うとした風景でも何でもなかった。グラウンドの練習風景など、教師の私には毎日のように見ていたが、それでもなかった。この眼で見たものと、心の奥底にあるイメージとが組み合わさって出来た一種の心象風景であった。

(「自句自解(五十句)」『増補能村登四郎読本』前出 三八七頁)

この解説を読むと、一人で槍投げの練習を続けている青年は、「む

なししい気分でもそれでも俳句を作っていた」という登四郎に重なってくる。単なる写生ではなく、心の底にあるイメージと組み合わせた心象風景であったのだ。孤独や虚しさに堪えつつ修練を怠らない登四郎であったからこそ、このような句ができたのである。

以上のように、眼前に見たものをそのまま句に纏めず、一度自分の心の中を潜らせて作るという方法が、登四郎の特色である。しかも、抽象的な作風ではなく、写生を土台としたもので、必ず句に中心となるモノが詠み込まれていた。この、具象性と心象性のどちらも兼ね備えていくことが、芸術性を高めて失敗しないポイントであると考える。

## 二 登四郎理論の応用—習作—

それでは、実際に俳句を作る場合、どのように具象性と心象性を備えて行けば良いのか。日頃は頭の中で行う推敲過程を文章で記述して、登四郎理論の応用を試みてみたい。

(例1)

蜘蛛の囀の編み目細かく編み上がる

原作

蜘蛛が一生懸命に巣を作っている。その編み目は細かく、丹念に丹念に巣を作る蜘蛛の根気強さに感嘆した。しかし、「編み目細かく」はその気持ちを表現するためには、平凡すぎる、いわば見たままの表現だと感じ、次のように推敲した。

格調の高く蜘蛛の囀編み上がる

奈美

さらに、連想を働かせ、次の句を得た。

眠葉の効くまで蜘蛛の囀編みどるる

原作

蜘蛛の囀を繕ふ眠葉効かざる夜

奈美

(例2)

赤々と群れ咲きにけり鶏頭花

原作

鶏頭の花が赤々と群れ咲いている。野性的な生命力の充実した鶏頭の花に圧倒された。見ているうちに、自分の心が高ぶってくるのがわかる。植物というよりは獣の印象のする花である。この生命力、獣のような荒々しさを是非表現したいと思い、次のように推敲した。がわかる。植物というよりは獣の印象のする花である。この生命力、獣のような荒々しさを是非表現したいと思い、次のように推敲した。

鶏頭のいのち荒々しく対峙

奈美

さらに、連想を働かせ、次の句を得た。

鶏頭の束ねらるるを拒みたり

奈美

肚すでに決まつてをりぬ鶏頭花

奈美

以上、二例であるが推敲過程を記述してみた。

私の場合、眼前の景物に感動して、その感動をどのようにより適切な表現で表せば、自分の裡なるものと眼前のものが一体となるかが問題であった。その一句が一応成功すると、連想が広がることによって、登四郎のいう「濾過」の作業が頭の中で行われることが、今回の記述によって意識できた。

おわりに

俳句は常に「不易」と「流行」のバランスを取りつつ、創作していかねばならない。「不易」に偏れば安全ではあるが、月並な句になってしまう。一方、「流行」に偏れば新しいだけで、芸術性の伴わない浅薄な作に陥ってしまう。

バランスをうまく取っていくには、やはり自分なりの理論が必要

である。本研究では、登四郎の理論を応用して、自作の推敲に役立てようとしたが、自分の作り方というものを改めて意識することができた。私の場合、初学の際に山口誓子から写生の大切さを厳しく教え込まれているため、まず眼前のモノそのものに対する感動がなければ、なかなか「濾過」作業までは到達できないのだ。

最近、軽く思いがちになっていた写生を改めて見直し、今後の創作活動の方針を立て直したい。

引用参考文献

『増補能村登四郎読本』富士見書房 平成十二年十一月  
高浜虚子編『新歳時記』三省堂 増訂初版昭和二十六年十月

二〇〇三年 十月三十一日受付  
二〇〇三年十二月二十五日受理